エマルのニン・ディンギル任官式における 行列の中の歌い手

The Singers in the Procession of NIN.DINGIR's Installation at Emar

小板橋 又 久^{*}
KOITABASHI Matahisa

ABSTRACT An important part of the NIN.DINGIR's installation is carried by the processions between the father's house and the temple of the weather god (𒀭IM). There are five processions in this installation drama (*Emar* VI 369). We focus on the fourth procession (*Emar* VI 369: 45). After the priestess goes to the weather god's temple on the day of enthronement, she is carried to her father's house in the evening. We can see the order of participants clearly in *Emar* VI 369: 45. Namely, the singers are first, the NIN.DINGIR is second, and the divine weapon is last. The singers lead the fourth procession and it is likely that this involved singing or playing musical instruments, though no such mention is made. We can not see clearly the manner of procession from another ancient Near Eastern texts. The passage of *Emar* VI 369: 45 is unique from the point of musical culture in the ancient Near East.

What is the function of musical activity in *Emar* VI 369: 45? It can be said that the divine weapon is associated with the NIN.DINGIR's sacred office in comparison with the text of Assyrian royal enthronement ritual (MVAG 41/3). The priestess is carried by two of her brothers in the fourth procession just like images of gods or divine emblems which are depicted in some drawings of the ancient Near East. We can see that the procession to the father's house is focused on the priestess. The city of Emar comes to a crisis when the former priestess died. The new priestess, who may bring welfare to the city of Emar, is sacred and important for the people of Emar. Processions, which accompany images of gods or divine emblems, function as a pattern of hierophany. Music is effective to produce hierophany in processional rituals. Thus we might see a production of hierophany in the musical activity of the fourth procession.

* 東京都立武蔵高等学校教諭
Teacher, Tokyo Metropolitan Musashi High School

はじめに

北シリアの古代都市エマルからは、アッカド語を中心とした粘土板文書が1100点ほど出土しているが、出土した文書の内容は法的文書、宗教文書、文学、書簡、辞書など多岐な分野にわたる。⁽¹⁾ 祝祭、例祭、供物リスト、ハッティの神々への祭儀を記した文書からなるエマル出土の宗教文書から、紀元前2000年紀後半の北シリアの宗教に関する先例のない情報が幾つかもたらされた。⁽²⁾ また、宗教儀式の重要な構成要素である音楽活動についても、エマル文書は新しい重要な情報をもたらした。⁽³⁾ これまで行われたエマルの音楽文化に関する研究としては、コーベのヒッタイト帝国のシリア属州における音楽考古学的な研究、および、ローワグレンのシリア・パレスティナに多く現われる小型の竖琴に関する音楽考古学的研究がある。⁽⁴⁾ さらにフレミングの *Emar VI 369* に関する宗教文化史的研究の中でも音楽に関する箇所が扱われているが、⁽⁵⁾ フレミングの研究は文献学的研究が中心であって、古代オリエントの音楽史的研究が不十分であると思う。そこで、本稿は、エマルの音楽活動を知る上で重要な *Emar VI 369* に関する音楽文化史的な一研究を目指す。本稿では、ニン・ディンギルの任官式に現われる行列の中の音楽活動に注目し、とりわけ *Emar VI 369*: 45 に見られる音楽の宗教的機能について検討する。

I. ニン・ディンギルの任官式と歌い手

1. *Emar VI 369* のアウトラインと歌い手

アルノが *Emar VI* の369番として編集したテキストは、4つの粘土板からなる (A: Msk 731027+Msk 74245, B: Msk 731042, C: Msk 74286a, D: Msk 731061+74274)。⁽⁷⁾ 本文中で引用する *Emar VI 369* のテキスト翻字は、Aのテキストによる。*Emar VI 369* は、全体として見ると、天候神バアル(^dIM)の女神官であるニン・ディンギル(NIN.DINGIR)の任官式を伝えている文書であると考えられる。⁽⁸⁾ 本テキストの中心的内容は、ニン・ディンギルが1日目によれば、2日目に聖別され、3日目には任命を受け、7日間の供犠と酒宴を経て、最終日には天候神の神殿へと移動するというものである。⁽⁹⁾ 76行以降には儀式の参加者に対する支給品(76-84行)、およびニン・ディンギルへの1年分の支給品(85-90行)、さらにニン・ディンギルの死後の儀式と遺産分与(91-94行)についての規定が書かれている(表1参照)。使用されている動詞の形は未完了形であるので、*Emar VI 369* は特定の祝典の施行記録というよりは、儀式をとりしきる管理者のための執行規定書であると考えられる。⁽¹⁰⁾ ニン・ディンギルの任官式の中で、歌い手は行列に参加し、最終日にはフルエリ神のために歌い (^{lu}2²za-ma-ru ^dHu-le-la i-za-am-ma-ru)、机の儀式(GARZA ^{gi}šBANŠUR)を執り行なっている(73-74行)。

表1 *Emar VI 369* のアウトライン

表題：エマル市のバアルのニン・ディンギルの儀式を記した文書（1行）
I. 1日目：ニン・ディンギルの選別（2-6行）
II. 2日目：ニン・ディンギルの聖別
1. バアル神殿にて剃髪、供犠と酒宴（7-19行）
2. 夕方、油注ぎとニン・ディンギルの父の家に移動（20-21行）
3. ニン・ディンギルの父の家にて供犠（22-28行）
III. 3日目：ニン・ディンギルの任命
1. 諸神殿を巡り、バアル神殿にて供犠と酒宴（29-39行）
2. 夕方、任官の儀式とニン・ディンギルの父の家へ移動（40-48行）
3. ニン・ディンギルの家とバアル神殿で七日間の供犠と酒宴（49-58行）
IV. 最終日：ニン・ディンギルのバアル神殿への移動
1. 諸神殿を巡りバアル神殿へ移動、バアル神殿での酒宴（59-69行）
2. ニン・ディンギルの部屋に家具・調度品を準備（69-71行）
3. フリエリ神への儀式（71-74行）
4. ニン・ディンギルは足を清め、床入り（74-75行）
補遺：支給品と遺産分与
1. 儀式参加者への支給品（76-84行）
2. ニン・ディンギルへの1年分の支給品（85-90行）
3. ニン・ディンギルの死後の儀式と遺産分与（91-94行）

2. *Emar VI 369* に見られる行列と歌い手

Emar VI 369 に反映されたニン・ディンギルの選別、聖別、任命等の儀式の進行を考える上で、行列はそれぞれの儀式が行われる場を結ぶ重要な役割を果たしている。*Emar VI 369* には5回の行列の記事が現われるが、執り行われる日時の観点から、剃髪の日、任官の日、最終日の行列と大きく三つに分類できる（表2参照）。ニン・ディンギルは、剃髪の日と任官の日にバアル神殿に行き、それぞれの夕方には父の家に戻っている。任官の日には、バアル神殿の後に、ビート・トゥクリ、ガッダ神殿などを巡る行列が現われる。神殿に向かう行列にはいずれも犠牲獣が伴っている。総ての行列には歌い手達とニン・ディンギル、および神の武器が現われる。

本稿において注目する第45行の行列は、任官式を終えて、夕方、父の家に戻る行列である。他の4回の行列と違って、第45行に見られる行列は、行列に加わる人物の歩いた順番がテキストからはっきりと読み取れる。すなわち、「神々の武器が彼女の後ろを行き (⁶⁸TUKUL DINGIR.MEŠ EGIR-ša ta-a-lak)、歌い手達が彼女の前を行く (¹⁰²meš za-ma-ru a-na pa-ni-ša DU-ku)」。43-44行には「彼女の二人の兄弟が肩に彼女を持ち上げて、父の家に行く (2 ŠEŠ-ša a-na bu-u₂-di i-na-aš-šu-ši-ma i-na E₂ a-bi-ši DU-lak)」という記事があるので、ニン・ディンギルは担がれて行進したと考えられる。したがって、*Emar VI*

369：45 に見られる行列の中の歩く順番は、以下のような図式となる。

フレミングの言うように、歌い手達は常に先頭であり、犠牲獣が次に来て、ニン・ディンギルが三番目、神の武器が最後に行くという順番が、ニン・ディンギル祭儀の行列全体に当てはまるのかもしれない。⁽¹²⁾ 行列を先導している歌い手達は、何も記述はされていないが、黙っていたわけではなく、歌唱行為や楽器の演奏などの音楽活動を執り行⁽¹³⁾っていたと考えられる。

表2 Emar VI 369 に見られる行列

時	出発地	到着地および経由地
①剃髪の日（7-8行）	不明	バアル神殿
②任官の日（29-30行）	父の家	バアル神殿
③任官の日（33行）	バアル神殿	ビート・トゥクリ→ガッダ神殿 →バアル神殿
④任官の日（45行）	バアル神殿	父の家
⑤最終日（63-64行）	父の家	ビート・トゥクリ→ニン・クル神殿 →バアル神殿

3. 古代オリエントにおける宗教儀式の行列に現われる音楽奏者

古代オリエントの文献、および図像資料から、宗教儀式とかかわりがある行列の中に、音楽の演奏に携わる人物が現われる例が幾つか確認できるが、行列に参加する参加者を特定しきれないし、行列の参加者の歩く順番も分かる部分もあるが、はっきりと読み取れない場合が多い。例えば、詩篇68篇には、聖所で行われる神の行進中に樂人が現われる。

「歌う者達（šārtm）が先に立ち、絃を弾く者達（nōgʾnīm）が後になり、
その間に手打ち太鼓を鳴らして（tōpēpōt）おとめらが行く。」（詩篇68：26）

詩篇68篇26節から、歌い手、手打ち太鼓奏者、絃を弾く者という順番で進む樂人達の行列を知ることができるが、この行列が一体いかなる宗教儀式の中で執り行われるか、どこからどこへ向かうのか、また、行列に参加するのは樂人達だけなのか、について旧約資料からはよく分らない。⁽¹⁴⁾

メソポタミアやヒッタイトの資料からは、年次祭などの大祭の行列中に参加する樂人

達が現われる。例えば、イディングガンのイナンナ賛歌 (SRT1 35-82) (イシン・ラルサ時代) から、イナンナの聖所に向かう行列を読み取ることができる。行列には祭司、軽業師、その他の祭儀に携わる者と思われる人物が加わっているが、⁽¹⁵⁾ algar, ub, lilis, balag のような楽器をもった楽人が先頭に立っていたと考えられる。行列に参加している人々は「清らかなイナンナの前を歩く」⁽¹⁶⁾ (ku₃-^dinanna-ra igi-ni-še₃ i₃-dib-be₂) という表現から、行列にはイナンナの神像、もしくはイナンナのエンブレムが同行していたと考えられるが、祭儀に携わる者達が具体的にどのような者達なのかは、必ずしもよく分らない。⁽¹⁷⁾

また、ウルクのアヌ神殿の典礼 (AO 6459 obv. 3) (セレウコス朝時代) によると、ウルクにおいて、タシュリトゥ月の1日から8日にかけて、アヌの銀と金の車が朝の小さい食事と共にアキトゥの家の高き所に向かい、歌い手達がそれらの前を行くという記述が出てくるが⁽¹⁸⁾ (hu₂NAR.MEŠ ina IGI-šu-nu DU₃-ak), 楽人の後に続く銀と金の車の位置関係ははっきりしない。

さらに、ヒッタイトの資料の中で、キラム祭やアンタフシム祭などの大祭の行列に、楽人が同行する記述が現われる。例えば、キラム祭を伝える文書から (KBo X 23 ((+))22+KBo XI 67), 王と王妃が王宮から役人と護衛と共に神殿に向かい、踊り手達⁽¹⁹⁾ (hu₂meš HUB.BI₂) が踊るという記事が出てくるが、文脈からは、王・王妃、侍従、護衛、踊り手達の歩く順番ははっきりしない。⁽²⁰⁾ アラジャ・ホユックの南側にあるスフィンクス門に描かれたレリーフ (前14世紀頃) (図1) は、キラム祭の場面を描いたものとも言われるが、⁽²¹⁾ 祭壇の上に置かれた雄牛 (図1-①) に向かってリュート系の絃楽器を演奏する楽人 (図1-⑥) と軽業師 (図1-⑤) が描かれている。⁽²²⁾ アラジャ・ホユックのスフィンクス門に描かれたレリーフから、一種の行列を読み取ることが可能かもしれないが、はっきりしているのは神像の前で犠牲が捧げられる儀式的場面を読み取ることができることであり、楽人と軽業師の活動が全体の儀式の中でどのようにつながるのかについては、依然として問題が残るように思われる。

一方、アンタフシム祭を伝える文書 (KBo IV 9 I 33-44) (帝国時代) からは、祭の16日に王宮から神殿に向かう行列が読み取れる。⁽²³⁾ 王と王妃が何人かの役人と護衛に先導され王宮を出て、王と王妃を囲むように楽人 (hu₂meš ALAN.ZU₃) は *arkammi*, *huhupal*, *galgal-turi* などの楽器を演奏しており、王の後には *siš* TIBULA を伴奏に踊る一団⁽²⁴⁾ (hu₂meš ZI-IT-TI) が続く。楽人と踊り手、および王・王妃、さらに神官と侍従・護衛との位置関係は、文脈からははっきりとしない。

年次祭とは違う不定期の祭典中の行列に現われる楽人を伝える資料として、ダビエによる神の箱のエルサレムへの運び入れの記事がある。⁽²⁵⁾ 一回目の神の箱の運搬に関する記

図1 アラジャ・ホユックの南側にあるスフィンクス門に描かれたレリーフ
(前14世紀頃) (K. Bittel, *Les Hittites*, 190-94 より作成)

述によると（サムエル記下6：4-5），アビナダムの息子のアフヨとウザが新しい車を御して、アビナダムの家から神の箱を運び出した時、アフヨは箱の前を歩いていた。ダビデとイスラエルの全家は神の箱の後をおそらく歩き、*kinnôr, nēbel, tōp, mēna'an'im, šelšeltm*などの総てのもみ材のもので (*b'kōl 'aššy b'rōštm*) 鳴らして、主の前で喜び踊った (*m'saḥāqtm līpnēy YHWH*)。サムエル記の記述から、以下のような図式が読み取れるが、ダビデ、イスラエルの全家、楽人の歩く順番は特定できない。ただし、ウルクのアヌ神殿の典札 (AO 6459 obv. 3) の記事と *Emar* VI 369：45 の記事から、ダビデ、イスラエルの全家、楽人の行進部分についていうと、楽人が先頭に立っていた可能性がある。

他の例と比較して、行列の参加者と歩いた順番が比較的是っきりと特定できるのはヨシュア記の記述である。エリコの陥落の際に、エリコの町の周囲を回ったイスラエルの行列は、戦争の場面ではあるが、一種の宗教儀式と見ることもできるかもしれない。⁽²⁶⁾ヨシュア記6章9、13節から、戦士が角笛 (*šōpār*) を吹き鳴らす祭司の前を行き、後衛が契約の箱の後ろを進んだことが分かる。ザイデルの言うように、契約の箱の後ろを行く後衛の者 (*m'assēp*) も戦士である可能性が高い。⁽²⁷⁾ヨシュア記6書の記述から、戦士、祭司、契約の箱、後衛という行列の順番を読み取ることができる。しかし、ヨシュア記は後代の編集者による加筆修正によって、資料の原形がはなはだしく損なわれていると言われるので、ヨシュア記6章の記事に現実の宗教儀式がどれだけ反映されているかについては注意する必要がある。⁽²⁸⁾

Emar VI 369：45に見られる行列は、古代オリエントの音楽活動の記事の中で貴重な情報を提供してくれる。すなわち、任官式という特定の宗教儀式の一場面として、歌い手を含む行列の参加者が明瞭に特定できるし、行列の参加者の歩く順番が文献からはっきりと読み取れる。

II. *Emar* VI 369：45に見られる音楽の宗教的機能

Emar VI 369：45に記された、バアル神殿から父の家に向かう行列の中で執り行われる音楽には、一体いかなる宗教的機能が読み取れるだろうか。

1. ニン・ディンギルの後ろを行く武器

ニン・ディンギルの後ろに続く武器／斧 (⁽²⁹⁾𒊕TUKUL/*ḥa-ši-in-nu*) は、いかなる役割を果たしているか。ハルマの月の祭りを伝えるエマル文書によると、神の斧 (*ḥa-ši-in-nu* *ša* DINGIR) は、ダガン神殿にとどまる (*u₂-ša₁₀-ab*) (*Emar VI 446: 100^V*) という記事が出てきており、神々の武器は儀式に用いられる神具であると思われる。*Emar VI 369* の中で、ニン・ディンギルの父は、剃髪の日⁽³⁰⁾に、神をたたえるなんらかの所作と考えられるクバドゥのために、神々の武器を持ち上げる (10行)。任官式の日、バアル神の前で、神々の武器はクバドゥのために持ち上げられる (31行)。任官式の終わった後、父の家にニン・ディンギルが7日間滞在するが、その間に神々の武器は、ニンクル神の前に置かれる。*Emar VI 369* の中では、フレミングが言うように、神々の武器はニン・ディンギル⁽³¹⁾の職務を表す標章なのかもしれない。

メソポタミアの宗教文書の中には、「神々の武器」と表現される祭器に関する記事が度々出てくる。ここで注目したいのは、アッシェルから出土したトゥクルティ・ニヌルタ1世 (在位前1244-1208年) 時代のもと考えられる、王の即位式を記した文書 (*KAR 135, 137, 216*)⁽³²⁾に現われる神の武器である。アッシリアの王の即位式を伝える文書から、アッシェル神のエクル神殿内で新王に対する王権授与式の次第が読み取れる。⁽³³⁾額帯 (*kulūlu*) が王の頭に着けられ、王杖 (*ḥaṭṭu*) が王に手渡されて新王に王権が授与される前に、祭司は「アッシェル神の冠 (*agā ša Assur*) とニンニル神の武器 (⁽³⁴⁾𒊕TUKUL. MEŠ *ša* ⁽³⁵⁾*Ninlil*)」を王の「高座 (*parakku*)」のもとに据え、これに供儀を捧げる (1 UDU. SISKUR *ana pani epaš*)。音楽を伴う行列の文脈ではないが、アッシリアの宗教文書から、「神の冠」とともに「神の武器」が供物を捧げられる神の象徴であり、新王に与えられる王権が神聖なものであることを印象づける役割を果たしていると考えられる。⁽³⁶⁾

Emar VI 369 に出てくる「神々の武器」は、アッシリアの宗教文書に現われる特定の神名が付いた「ニンニル神の武器」と表現の違いはあるが、⁽³⁷⁾アッシリアの王の即位式と同じように、ニン・ディンギルの職務が神聖なものであることを大衆に印象づける役割を果たしていると考えられる。

2. 肩に担いで運ばれるニン・ディンギル

行列に加わる人物等の筆頭に犠牲獣が書かれていることから、フレミングが言うように、神殿に向かう行列の中では、屠殺される動物に焦点が当てられていると見ることができるかもしれない。⁽³⁸⁾その場合、歌い手達の音楽活動は、犠牲の奉納とかかわる神の賛美の意味合いが強いと思われる。

一方、ニン・ディンギルの父の家に向かう行列の中では、以下に指摘するように、ニ

ン・ディンギルに焦点が当てられていると見ることができる。*Emar* VI 369: 45 に見られる行列の焦点を考える上で注目したいのは、第43行に出てくる「彼女の二人の兄弟が肩に彼女を持ち上げる (2 ŠEŠ-ša a-na bu-u₂-di i-na-aš-šu-ši-ma)」という記事である。「肩に彼女を持ち上げる」というのは、具体的には椅子にのせて担ぐということかもしれない。⁽³⁹⁾

肩に担いで運ばれるものにはどのようなものがあるか、その事例を見ると、それらが特別なものであったことが理解できる。たとえば、エジプトのアビュドスから出土した石碑 (ラムセス II 世時代) には、女性の楽器奏者を含むある宗教儀式の行列の中で、神の象徴が入っていると思われる船を神官と考えられる人物達が担ぐ様子が描かれている⁽⁴⁰⁾ (図2)。また、新エラム時代 (前1100-539年) に位置付けられるイランの聖所クレ・ファラーフの岩壁には、楽器演奏者を含む宗教儀式の行列が描かれており、第3の岩壁レリーフ (The Kul-e Farah III rock relief) の南側には、4人の人物に担がれた神像が現われる⁽⁴¹⁾ (図3)。さらに、旧約聖書に記されたグビデによる神の箱のエルサレムへの運び入れの記事の中で、車で運ぼうとして失敗した後、神の箱は、二度目にはレビ人達が担ぎ棒 (*mōtōt*) で担ぎ (*yis'ā*)、無事にエルサレムに運びこむことができた (歴代誌上 15: 15)。神の箱の二度目の運搬は、担ぐことにより、車で運んだ一度目よりも丁重に扱われていると見ることができる。前述したアッシリアの王の即位式を記した宗教文書の中でも、王権を授与された後、王は神殿から宮殿に運搬人達に担がれて宮殿に戻っている⁽⁴²⁾ (*LU₂.MEŠ ša šarra iš-ši-u₂-ni*)。

担ぐ人物が神官、祭司、運搬人達と兄弟達、さらに担がれた物が神像、神の象徴、ないしは王と女神官という違いはあるが、古代オリエントの図像資料および旧約資料とアッシリアの宗教文書から、エマル文書に現われる肩に担いで運ばれるニン・ディンギルは、一般人からは明確に区別されなければならない神聖な状態にある扱われた方をされ⁽⁴³⁾ていると見ることができる。

3. 神聖顕現の演出

Emar VI 369: 45 の行列の中で、焦点の当たっていると考えられるニン・ディンギルは、いかなる存在であったか。

雨とその結果の豊穡をもたらす天候神バアルは、エマルの神々の中でも重要な神であり、その祭儀の維持は全市の関心であって、エマル市の総てがバアルの恩恵に預かっていたと考えられる。そして、バアルのニン・ディンギルは、バアルとエマル市の間を取り結ぶ鍵となる人物であったと思われる。おそらく前任者の死によって、エマル市とバアルの間には断絶が生じる。エマル市の生活において、バアルのニン・ディンギルの任

図2 アビュドスから出土した石碑（ラムセスII世時代）
(O. Keel, *The Symbolism of the Biblical World*, 337 より作成)

図3 クレ・ファラーフの岩壁に描かれたレリーフ（新エラム時代）
(E. De Waele, "Musicians and Musical Instruments on the Rock Reliefs in the Elamite Sanctuary of Kul-e Farah (Izeh)," Pl. IIb より作成)

官式は、前任者の死によって引き起こされた断絶を、新たなニン・ディンギルが就任することによって修復するという目的をもっていたと考えられる。新たなバアルのニン・ディンギルは、エマルの人々にとって福をもたらす存在として歓迎されたと思われる。

Emar VI 369: 45 の行列に見られる音楽の宗教的機能は何か。宗教学の観点からすると、神幸行列は、神聖顕現 (hierophany) の一形式である。⁽⁴⁴⁾ 京都祇園祭の山鉾巡幸、キリスト教の謝肉祭、復活祭のパレードは、行列を歓迎する信者と観衆との交歓を生ずる役割を果たしたと考えられる。⁽⁴⁵⁾ 日本の雨乞いを中心とした宗教儀礼に関する民族音楽学的な研究の中で、朱家駿は、「目によって確認することのできない神霊のあらわれは音によって確認され、そして、音によって神霊のあらわれをうながしたりする」、と述べている。⁽⁴⁶⁾ エマルのニン・ディンギル祭儀の中で、あたかもご神体のように肩に担がれながら運ばれるニン・ディンギルは、エマル市に福運をもたらす神聖な存在であった。神聖な存在がそこにあることを、音楽は「神々の武器」と共に強く会衆に印象づける効果があったと思われる。特に、バアルのニン・ディンギルがエマル市において一般の市民の娘から選ばれたため (*Emar VI 369: 3*)、俗世界の娘を神聖化していく過程を十分にふむ必要があったと考えられる。⁽⁴⁷⁾ *Emar VI 369: 45* に見られる行列において、音楽は神聖顕現を会衆に演出する機能があったと考えられる。⁽⁴⁸⁾

Emar VI 369: 45 に見られる行列において、一般人とは違う神聖な扱いを受けている女神官に焦点が当てられていると想定できる。*Emar VI 369: 45* の行列を導く歌い手達の音楽からは、神聖顕現を会衆に演出する機能を読み取ることが可能である。

おわりに

天候神バアルの女神官の任官式を伝える *Emar VI 369* は、古代オリエントの音楽文化史から見て、貴重な情報を伝える。すなわち、*Emar VI 369: 45* に見られる行列の中の歌い手は、任官式という特定の宗教儀式の一場面の中で、歌い手を含む行列の参加者が明瞭に特定できるし、バアル神殿から父の家へとその行列の出発地と到着地が明確に分かる上で、行列の参加者の歩く順番が文献からはっきりと読み取れる。*Emar VI 369: 45* から、古代オリエントの神幸行列の中で、楽人が行列を先導する場合が多かったことが考えられる。*Emar VI 369: 45* の行列を導く歌い手達の音楽からは、神聖顕現を会衆に演出する宗教的機能を読み取ることが可能である。

* 本稿は、2004年2月14日(土) 江東区総合区民センター研修室で開催された「津村俊夫先生還暦記念研究会」において、口頭発表した原稿をもとに加筆、修正したものである。

研究会当日、聖書神学舎の津村俊夫先生ならびに、筑波大学の池田潤氏、京都産業大学の竹内茂夫氏より貴重な御教示をいただいた。また、中央大学の山田雅道氏には、草稿を丁寧に読んでいただき、貴重なご意見をいただいた。さらに、立教大学の月本昭男先生から、貴重なご助言をいただいた。ご教示とご助言をいただいた皆様に衷心より謝意を表します。

津村俊夫先生が、御健勝のうちに還暦をむかえられましたことを、心よりお喜び申し上げます。津村先生が、今後も、お元気で活躍されますことを衷心より祈念いたします。長年にわたって御教示いただきました津村先生に、本稿を献げたいと思います。なお、本稿で引用したテキストと雑誌の略号は、*Chicago Assyrian Dictionary R* および *Ugarit-Forschungen 34* の略号を用いた。

注

- (1) エマル文書の概観については、*Emar VI* のみではあるが、次の研究がある。M. Dietrich, “Die akkadischen Texte der Archive und Bibliotheken von Emar,” *UF* 22 (1990), 25-48. エマル文書の主なテキスト集としては、以下のものがある。D. Arnaud, *Recherches au pays d'Aštata, Emar VI*, 1-4, Paris, 1985-87 (=Emar VI); idem, *Textes syriens de l'âge du Bronze récent*, Barcelona, 1991 (=TBR); G. Beckman, *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen*, Padova, 1996 (=RE); A. Tsukimoto, “Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I-III),” *Acta Sumerologica* 12 (1990), 177-259; 13(1991), 275-333; 14(1992), 289-310(=ASJ 12/13/14-T).
- (2) エマル出土の宗教文書の概観については、次の研究を参考にした。D. E. Fleming, “The Rituals from Emar: Evolution of an Indigenous Tradition in Second-Millennium Syria,” in M. W. Chavalas and J. L. Hayes (eds.), *New Horizons in the Study of Ancient Syria*, Malibu, 1992, 51-61; idem, “The Emar Festivals: City Unity and Syrian Identity under Hittite Hegemony,” in M. W. Chavalas (ed.), *Emar: The History, Religion, and Culture of a Syrian Town in the Late Bronze Age*, Bethesda, 1996, 81-121.
- (3) 語彙テキスト (*Emar VI* 545: 380^r-381^r, 387^r-393^r) から、幾つかの楽器名が確認できる。主に祭儀文書の中で、歌い手 (*nu-a-ru*, LU₂.ŠIR₃, *za-ma-ru*, *za-mi-ra-tu*) が儀式に携わるということが読み取れる。(*nu-a-ru*) *Emar VI* 336 : 83 ; 426 : 2^r ; (LU₂.ŠIR₃) *Emar VI* 278 : 5 ; 460 : 30^r ; (*za-ma-ru*) *Emar VI* 369 : 30, 45, 63, 79, 81, 82 ; 370 : 43^r, 78^r, 109^r ; 385 : 23, 23, 31 ; 388 : 40 ; 391 : 2^r ; 394 : 23, 25 ; 431 : 4^r ; (*za-mi-ra-tu*) *Emar VI* 370 : 59 ; 388 : 67 ; 410 : 4^r ; ASJ 14-T 49 : 8. *šar-ru* という語も、歌い手を表わす可能性がある。(*šar-ru*) *Emar VI* 372 : 6^r ; 385 : 14, 24, 37 ; 386 : 10^r ; 387 : 22 ; 388 : 18, 25, 51, 60, 65 ; 395 : 4^r, 12^r. 歌い手の儀式における主な役割は、特定の神のために歌を歌うことであったと考えられる。「歌い手はフリエリ神のために歌う」(^{lu2}*za-ma-ru* ^d*Hu-le-la i-za-am-ma-ru*)」(*Emar VI* 369 : 73) ; 「歌い手達が入り、シ

ユワラ神とウグル神のために歌う (^{lu2 meš}za-ma-ru ir-ra-bu-ma ^{dŠu-wa-la} dU.GUR i-za-am-ma-ru) (Emar VI 385: 23); 「歌い手達は男神と女神のために歌う (^{lu2 meš}za-ma-ru DINGIR.MEŠ ^{u3} ^{dIš8-tar2} MEŠ-ti <i>-za-am-mu-[ru]</i>)」 (Emar VI 370: 43); アブーの月の祭を記述した文書に出てくる「神々の歌を執り行う (zi-ma-ra DINGIR.MEŠ DU3-šu)」 (Emar VI 452: 48^v) のも、歌い手であったと考えられる。

- (4) A. Caubet, “Recherches sur l’archéologie musicale dans les provinces syriennes de l’empire hittite (Ougarit, Emar),” in International Colloquium: Music Archaeology in the Aegean, Anatolia and Neighbouring Regions. Deutsches Archäologisches Institut-Istanbul 12-16 Avril 1993 (handout).
- (5) B. Lawergren, “Distinctions among Canaanite, Philistine, and Israelite Lyres, and their Global Lyrical Contexts,” *BASOR* 309 (1998), 41-68.
- (6) D. E. Fleming, *The Installation of Baal’s High Priestess at Emar*, Atlanta, 1992.
- (7) アルノとフレミングのテキスト校訂では、59行以降の行番号がずれている。本稿ではフレミングの行番号を採用する。テキストの校訂については、Fleming, *The Installation of Baal’s High Priestess at Emar*, 9-30 を参照せよ。
- (8) Emar VI 369 に関する研究について、次の研究も参照せよ。M. Dietrich, “Das Einsetzungsritual der Entu von Emar (Emar VI/3, 369),” *UF* 21 (1989), 47-100.
- (9) Emar VI 369 の内容については、Fleming, *The Installation of Baal’s High Priestess at Emar*, 63-65, Dietrich, *UF* 21, 87-89 を参照せよ。ニン・ディンギルの任官式が、全体として何日間にわたって催されたか、については 7 日間と 9 日間と意見の違いがある。(7 日間) *Ibid.*, 75; D. G. Frayne, “Notes on The Sacred Marriage Rite,” *BiOr* 42 (1985), 20. (9 日間) Fleming, *The Installation of Baal’s High Priestess at Emar*, 65.
- (10) Fleming, *The Installation of Baal’s High Priestess at Emar*, 70.
- (11) 二人の兄弟はおそらく椅子の上に乗せて彼女を運んだと、フレミングは考えている。*Ibid.*, 108-109.
- (12) *Ibid.*, 108.
- (13) *Ibid.*, 93. 例えば、アッシリアの王サルゴンの碑文には (TCL 3 159), 歌い手達が楽器と共に行進している記事がある。*i-na hu-ud lib-bi u3 ri-ša-ti it-ti* ^{lu2}NAR.MEŠ ^{u3} ^{meš}ZA3.MI2.MEŠ ^{u3} *ta-ba-li a-na qī2-rib uš-man-ni-ia e-ru-ub* 「心の喜びと歓喜のうちに、歌い手達、竖琴、シンバルと共に、私の野営地の中に私は入った。」 Cf. CAD R, 380.
- (14) モーヴィンケルは、詩篇68篇はヤーヴェが王として聖所に勝利の入場を行なったことを描いている、と述べている。S. Mowinckel, *The Psalms in Israel’s Worship*, Oxford, 1982 (reprint of 1962 ed.), 170-72.
- (15) D. Reiseman, “Iddin-Dagan’s Sacred Marriage Hymn,” *JCS* 25 (1973), 187-88; T. Jacobsen, *The Harps that Once...*, New Haven, 1987, 115; W. H. Ph. Römer, *Sumerische ‘Königshymnen’ der Isin-Zeit*, Leiden, 1965, 129-30.

- (16) Römer, *Sumerische 'Königshymnen' der Isin-Zeit*, 129-131.
- (17) 依田泉氏による口頭の御教示によると, SRT 1 35-82 において, 神の前をいろいろな人が行くということは読み取れるが, その順番や歩いている人物が具体的にいかなる人物かは, シュメール語からはっきりしないとのことである。
- (18) F. Thureau-Dangin, *Rituel accadiens*, Paris, 1921, 89, 93-94.
- (19) I. Singer, *The Hittite KILAM Festival*, Part Two, Wiesbaden, 1984, 9-13; S. de Martino, "Music, Dance, and Processions in Hittite Anatolia," in J. M. Sasson editor in chief, *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol. IV, New York, 1995, 2666.
- (20) 中村光男氏の口頭による御教示によると, ジンガーによる行進の概念図はテキストに出てくる順番によるものであり, 実際の行進の順番を表わしたものとは言えない, とのことである。I. Singer, *The Hittite KILAM Festival*, Part One, Wiesbaden, 1983, 90.
- (21) Martino, in *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol. IV, 2667.
- (22) アラジャ・ホユックのスフィンクス門に描かれたレリーフについては, 例えば次の研究を参照せよ。K. Bittel, *Les Hittites*, Paris, 1976, 187-205.
- (23) テキストと翻訳については, 次の研究を参照した。E. Badali und C. Zinko, *Der 16. Tag des AN.TAH.ŠUM-Festes*, Graz, 1994, 22-25.
- (24) テキストの解釈については, Martino, in *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol. IV, 2666 も参照せよ。
- (25) サムエル記下 6 章の行進に関する最近の研究として, 次のものがある。D. Wright, "Music and Dance in 2 Samuel 6," *JBL* 121 (2002), 201-25.
- (26) H. Seidel, *Musik in Altisrael*, Frankfurt am Main/Bern/New York, 1989, 55.
- (27) *Ibid.*
- (28) 石田友雄他『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局, 1984, 217.
- (29) 45, 46, 63行に現われる ^{MS}TUKUL の代わりに, *ha-si-in-nu*「斧」と出てくるテキストがある。Cf. Fleming, *The Installation of Baal's High Priestess at Emar*, 50, n.7.
- (30) クバドゥについては, 次の研究を参照せよ。 *Ibid.*, 162-69.
- (31) *Ibid.*, 166.
- (32) それらの事例としては, CAD K の *kakku* "3 standard with divine symbol" を参照した。CAD K, 55-56.
- (33) この文書の解読と研究については, 次の文献を参考にした。K. F. Müller, *Das assyrische Ritual, Teil I: Texte zum assyrischen Königsritual*, MVAG 41/3, Leipzig, 1937, 4-58.
- (34) この文書の解釈については, 次の研究も参考にした。月本昭男「王権と宗教儀礼-古代バビロニア・アッシリアの場合」網野善彦他(編)『コスモロジーと身体』天皇と王権を考える 8, 岩波書店, 55-58.
- (35) MVAG 41/3 10 ii15. テキストの翻字については, 次の文献を参照した。CAD K,

55; CAD N-II, 255.

- (36) アッシリアとバビロニアの王は、「天から下った」王権の執行者として、一般人から明確に区別されねばならない格別な存在であり、即位式はそのことを公に承認させる儀礼であったと考えられる。月本「王権と宗教儀礼」, 60.
- (37) *Emar VI 369* に現われる神の武器は、多くの場合 ⁸⁵⁸TUKUL DINGIR.MEŠ と書かれる (*Emar VI 369* : 7, 10, 29, 31, 33, 45, 63). DINGIR.MEŠ 「神々」と複数で武器が形容される意味についてはよく分からない。フレミングは、一つ以上の神の武器があったことを想定している。Fleming, *The Installation of Baal's High Priestess at Emar*, 166. ⁸⁵⁸TUKUL DINGIR-lī₃ 「神の武器」と ⁸⁵⁸TUKUL が単数形の「神」で形容される場合もあるので (*Emar VI 369* : 46), DINGIR.MEŠ で書かれる場合も複数の神々の武器ということではなく、神の所有、もしくは神に属するという意味合いがあるのかもしれない。
- (38) *Ibid.*, 117.
- (39) *Ibid.*, 108.
- (40) O. Keel, *The Symbolism of the Biblical World*, Winona Lake, 1997 (Originally published: New York, 1978), 337, 408.
- (41) クレ・ファラーフの岩壁に描かれたレリーフについては、次の研究を参照した。E. De Waele, "Les processions avec statues divines sur les reliefs rupestres Élamites Kul-e Farah III et Kul-e Farah VI (Izeh)," *Akten des VII. Internationalen Kongresses für Iranische Kunst und Archäologie, München, 7-10. September 1976*, AMI, Ergänzungsband 6, Berlin, 1979, 93-100; idem, "Musicians and Musical Instruments on the Rock Reliefs in the Elamite Sanctuary of Kul-e Farah (Izeh)," *Iran* 27 (1989), 29-38.
- (42) MVAG 41/3 12 ii 40. テクストの翻字については、次の文献を参照した。CAD N-II, 88.
- (43) ウガリト語の1つの祭儀文書の中で、儀式に携わる王が身を清め (yrths) 「清浄である」 (mlk brr) (*KTU*² 1. 106 : 26-27) 状態と、「通常である」 (hl mlk) (*KTU*² 1. 106 : 23-24) 状態が対比されて現われる。*Emar VI 369* において、ニン・ディンギルが兄弟達に担がれるという行為も、通常とは違う清浄な状態にあることを示す表現であったことが考えられる。ウガリト語の *mlk brr* と *hl mlk* については、次の研究を参考にせよ。J.-M. de Tarragon, *Le culte à Ugarit d'après les textes de la pratique en cunéiformes alphabétiques*, Paris, 1980, 79-86.
- (44) Fleming, *The Installation of Baal's High Priestess at Emar*, 193.
- (45) 蘭田稔「行列」小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東大出版会, 1973, 139.
- (46) 上掲書, 139.
- (47) 朱家駿『神霊の音ずれ 太鼓と鉦の祭祀儀礼音楽』思文閣出版, 2001, 41.
- (48) この解釈は、池田潤氏の御示唆による。